

文京区立第九中学校 校長室通信 「文京九中 ここにあり」



平成28年度 第11号
平成29年3月17日発行



文京区立第九中学校 校長 小 椋 孝
■ TEL 03-3821-7178 ■ FAX 03-5685-4955
■ HP <http://www.bunkyo-kyo.ed.jp/daikyu-jh/>

3年生に送る言葉 ～ Boys, be ambitious! 「少年よ 大志を抱け!」 ～

この言葉をご存じの方も多いと存じますが、これはアメリカ合衆国の教育者で農学教育のリーダーとされるウィリアム・スミス・クラーク博士の言葉です。博士は、マサチューセッツ農科大学の学長を務めるかたわら、明治9年、北海道の開拓を推し進める日本政府の要請で1年間の休暇を取り、来日して札幌農学校の教頭に就任し、わずか8ヶ月で帰国しましたが、博士の残した農業、植物学、開拓精神等は彼の教え子や開拓関係者に大きな影響を与えました。後年、博士の功績を称え、札幌農学校（後の北海道大学）構内に「クラーク博士像」（胸像）が建てられました。さらに、昭和51年に札幌観光協会によって札幌市豊平区にある「さっぽろ羊ヶ丘展望台」に博士の全身像が建立されました。このクラーク博士像には、北海道を去るときに博士が学生たちに伝えたと言われる「Boys, be Ambitious（少年よ、大志を抱け）」という言葉が刻まれ、その右手を挙げる独特のポーズは「はるか彼方にある永遠の真理」を指し、そこに向かって大志を抱けとの思いが込められていると言われています。



「さっぽろ羊ヶ丘展望台」のクラーク博士像

この言葉は、私の心に残っている名言の一つです。私が小学校から中学校に進んだ入学式で、母校の小学校の校長先生が来賓祝辞で壇上に上がり、開口一番「Boys, be Ambitious! 少年よ大志を抱け! これからも頑張ってください。以上」と本当に短い祝辞をいただきました。会場にいるすべての人があっけにとられました。その後すぐに大きな拍手が沸き起こりました。このできごとからは、すでに40年以上の月日が経っていますが、今でも鮮明に頭の中に残っています。

明治初頭という時代背景もあり、「boys（少年）」という言葉が使われていますが、法律の世界や国民体育大会のカテゴリーにおいては、性別を問わず年若い人のことを「少年」と表していますので、私もそのように解釈しています。この言葉は、北海道開拓の礎を築くべく開学した札幌農学校で実学指導に心を砕き、教え子との別れの際に言ったものだと言われています。諸説はありますが、それに続く文章として示されているものがありますので、ここに紹介させていただきます。ぜひ参考にさせていただければありがたいと存じます。

Boys, be ambitious!

Boys, be ambitious.
Be ambitious not for money
or for selfish aggrandizement,
not for that evanescent thing
which men call fame.
Be ambitious for the attainment
of all that a man ought to be.

少年よ 大志を抱け

少年よ 大志を抱け
お金のためではなく
私欲のためでもなく
名声という空虚な志のためでも
なく
人はいかにあるべきか、その道
を全うするために、大志を抱け

九中の特色！「新聞への意見文」投稿 ～3学期掲載分の紹介（その2）～

これまでも何度か紹介させていただいていますとおり、本校では、国語の発展的な学習として文章をまとめる力を育成することや若者の意見発表のよい機会として、新聞の投書欄への投稿を勧めています。今年度も、行事や学校生活への思い、日頃感じていることなどを投稿し、今までで25人の生徒の意見文が新聞各紙に掲載されています。自分自身の考えを明確にして発信することは、自ら考え、判断し、行動する力の基盤となります。短い文章の中に、物事を正しくとらえた上で、感じたことや意見を表すことは、大人でもなかなか大変なことです。掲載された文は、これらのことをしっかりと自分自身の言葉で表しています。

なお、平成28年度に掲載されたものをまとめ、年度内に本校のホームページに掲載することにしていますので、機会がございましたら改めてご一読いただければありがたく存じます。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成29年2月20日（月）掲載

保護主義の広がりが心配だ

中学生 石井 達哉（15） 東京都文京区 [3年2組]

最近、米国やヨーロッパで保護主義的な動きが広まり、グローバル化の流れが行き詰ったように感じられ、僕は心配だ。

人と同じように匂にも自己中心的な考えを抱きがちだ。しかし、意見を主張するのはいいことだが、それを押しつけ過ぎてはいけないと思う。押しつけ合って衝突した顕著な例が、2つの世界大戦だろう。

何事も自国のことを最優先に考えようとする流れは、世界を大戦前と同じような状況に近づけている感じがひしひしとする。だが、僕たちは過ちから学んで、どこかで立ち止まり、冷静になる必要がある。

僕たちは中国製の服を着て、ノルウェー産のサケを食べ、米ハリウッドで作られた映画を見ている。人が助け合って生きていくように、国も一国だけでは成り立たない。

僕は、国同士が協力関係を保ちながら平和を維持する世界で、自分の将来の夢をかなえていきたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年2月22日（水）掲載

美しい日本語 使えるように

中学生 大宮 美春（14） 東京都文京区 [2年2組]

私はあるラジオ番組を毎日のように聞いている。リスナーの悩みについて助言したり、エールを送ったりと、番組なりの答えを出してくれる。その一つ一つが私の心に残ることに気付いた。美しい言葉が入っているからだと思う。きっと意識して一言一言話し、心に響くようにしているのだ。

これに気が付いてから、美しい日本語を使うのは大切なことだと感じるようになった。日本語は一つの意味に対してたくさんの言葉がある。その中から、美しい言葉を選んで使うことは美しい日本語を残していくためにも、人に伝わりやすくするためにも必要だ。私はこの番組をこれからも聞き、あたりまえのように美しい言葉を使いたい。

※ 毎日新聞「みんなの声」 平成29年2月28日（火）掲載

次は失敗恐れず挑戦したい

中学生 網代 愛優璃（14） 東京都文京区 [2年1組]

挑戦することは大切なことだ。なぜなら、挑戦することでそのことができるようになり、成長することができるからだ。

私にはこんな経験がある。学校で委員会の所属を決める時、私は入りたい委員会があった。その委員会には各クラスで1人は入れるが人気が高く、私の他に入りたい人が2人いた。そのためスピーチで決めることになった。私はその時、自信がなくて諦め、スピーチに参加しなかった。今思うとなぜ諦めてしまったのだろうか。どこに選ばれないという根拠があったのだろうか。とても後悔している。でも私はその経験があったから、挑戦することの大切さを知ることができた。

挑戦したから必ず成功するとは限らない。しかし、失敗から学べることもあると思う。挑戦して失敗したら、何回でも挑戦すればいい。何事も挑戦しないと始まらない。だから私は失敗を恐れずに挑戦したい。もし失敗しても、その挑戦で学んだことは必ず私の役に立つと思うから。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年3月2日（木）掲載

免許返納義務 望む理由

中学生 加藤 遼（14） 東京都文京区 [2年2組]

僕は高齢者の運転免許証の返納を義務化すべきだと思う。僕の祖母は一昨年の秋、高齢者が運転する車にひかれてこの世を去った。事故当時は晴れて、現場は見通しの良い直線道路だった。信号機のない横断歩道上の事故だったが、ずーとまっすぐの道なので、運転席から、横断歩道を渡る祖母の姿はしっかりと見えていたはずだ。

それにも関わらず、祖母はひかれて亡くなった。

祖母はまだまだ元気だった。事故の前に、夏休みの帰省で祖母の家に行ったとき、「遼くんが結婚するまでは生きていたいわね」と言っていた。

しかし、その言葉は実現することなく、何の前触れもなく突然になくなってしまった。僕はこんな思いをする人が増えてはいけないと思う。

この事故は、ドライバーが高齢になったことで、体が衰えていたことが主な原因だったという。

最近、高齢者が加害者になった自動車の事故が増えているように思う。報道される事故原因や、加害者になってしまった方の言葉は、「アクセルとブレーキを踏み間違えた」「事故のときの記憶がない」などが多く、僕は嫌な気持ちになってしまう。

祖母の事故も「よくある原因」で起きたものだ。体の衰えは誰にでも起きる自然なことなのだから、何らかの対応が必要ではないだろうか。

このような死亡事故が何度も起こる前に、また、自分たちが加害者になってしまう前に、高齢者の運転免許証の返納を義務化しなければならないと思う。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年3月16日（木）掲載

友とつかんだ志望校の合格

中学生 相川 幸輝（15） 東京都文京区 [3年2組]

高校受験。苦戦を強いられながらも僕はやっと「志望校合格」の結果を手に入れた。だがその瞬間は喜び半分、悲しみ半分だった。

いつもそばで支えてくれた友人がいる。彼の試験日は僕より早かった。試験前「合格して自分の受験を成功させる」と言った。合格するように祈っていたが結果は良いものではなかった。僕は彼の分まで頑張らなければと思った。励ますにはそれしかないと思ったのだ。強い気持ちで試験に臨み結果をいち早く伝えた。誰よりも喜んでくれた。

「受験は団体戦」という言葉がある。自分の努力とそれを支える仲間があってこそ、合格の感動がひとしおなのだと思う。

友人はその後、志望校の合格をつかみ取った。自分のことのようにうれしかった。

※ 朝日新聞「若い世代」 平成29年3月17日（金）掲載

また落語を聞きに行きたい

中学生 關谷 優希（13） 東京都文京区 [1年3組]

私は、落語が好きだ。なぜなら、聞いている人を笑顔にすることができるからである。

テレビ番組の「笑点」を見ていて、いつか生で落語を聞いてみたいと、ずっと思っていた。学校の校外学習で浅草演芸ホールに行くことになり、楽しみにしていた。

2時間ほどの時間は、あっという間に過ぎた。落語家の一人一人に個性があり、一つ一つの動作に工夫があった。扇子一つでいろいろなものを表現したり、顔の向きで人間関係を表したりできるのがすごかった。落語だけではなく漫才や講談も見ることができて、すごく楽しかった。

演芸ホールでの周りの人の楽しそうな笑い声は、今でも心に響いている。小さな動きでも思いのこもった話術を、これからも体験したいと思っている。

春は間近・・・「花いっぱい」活動を推進しています！

＜校庭南側の花壇が、鮮やかに彩られることが待ち遠しく感じられる頃になりました＞



暦の上では2月4日に「立春」を過ぎ、2月19日からの「雨水」、そして3月5日に「啓蟄」を迎え、春の訪れを間近に感じる季節となりました。

本校では、今年度までの3年間、公益財団法人「東京都公園協会」の花壇・庭づくり活動支援事業を受け、第九中学校「花いっぱい」活動に取り組んでまいりました。

この事業は、公益財団法人「東京都公園協会」が東京都都市緑化基金として2020年の東京オリンピックに向け、水と緑の回廊で包まれた美しい街東京を目指し、都内の緑化事業を支援するもので、公共的な場所での緑化活動を行うボランティア団体や小・中学校に活動費用を助成するものです。

今年度は、近隣町会からご提供いただいたプランターに花苗を植えるなど、本事業を活用して緑化活動を推進しています。特に、本校に設置されている花壇は、あまり陽当たりがよくないので、プランターを活用して校舎の校庭側や玄関周辺に花を飾っています。

また1月27日には、6組の皆さんが学習の一環として主事の方を講師として栽培活動に取り組み、校庭南側の花壇やプランターに数多くのチューリップの球根やパンジー、ビオラなどの花苗を植えてくれました。ちょうど入学式の頃には色あざやかなチューリップの花が咲き誇ると思いますので、保護者や地域の皆様方もぜひ楽しみにしてください。

＜6組の栽培活動の様子＞



＜お詫び＞

先日の土曜授業公開の際のアンケートで、教職員の電話対応についてご意見をいただきました。心証を害されるような対応があったとのことで、大変申し訳ございませんでした。このことを受け、教職員全員で相手の気持ちを受け止めながら丁寧な対応を行うように再徹底を図りました。振り返りの機会をいただき、ありがとうございました。今後とも十分に気を付けてまいりますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。